A Reading the Old Joruri Play, *Atago no Honchi* [The Origin of Atago]

KURUSHIMA Hajime

This article is based on a study of the original text of *Atago no honchi* [The Origin of Atago] an old joruri (dramatic narrative drama) published in the early modern period. It is based on the fifth edition of the *Kojoruri shohon shusei*, revised by Yokoyama Shigeru. The first three of the six sections are included.

According to the early joruri play *Atago no honchi* [The Origin of Atago] a Baekje general named Nichira, who came to Japan from Korea to serve as a tutor for Prince Shotoku. After demonstrating his divine powers and battling with Tengu and the Baekje army, he entered Mt. Atago, and was enshrined as the tutelary god. This rather far-fetched tale reflects the belief prevalent in the early modern period that the *Atago gongen* or tutelary god was the incarnation of Nichira. There is also a reference to the belief in fire prevention called "hibuse", a ceremony performed by Yamabushi (mountain priests) that continues to this day.

According to the *Nihon shoki* (Chronicles of Japan), Nichira was an official of the Baekje Kingdom who came to Japan in the 6th century at the invitation of Emperor Bidatsu, but was assassinated by the Baekje officials who accompanied him. However, from an early stage, he was mentioned in the biography of Prince Shotoku from and came to be understood as a high priest of Baekje and a teacher of Prince Shotoku.

This work is based on elements from the *Nihon shoki* and legends about the origin of Mt. Atago, and provides an interesting example of the reception and transmission of narratives from the medieval to the early modern period. The contents of the book shed light on the practices of Atago worship in the early modern period as well as the reception of medieval narratives. A close reading of this text reveals the dynamics of the transmission of this rich tradition of narratives from the medieval to the early modern period.

The contents of the annotations are the outcome of a study group organized by the author at Kyoto Seika University as part of his research project for a Japan Society for the Promotion of Science

研究ノート

古浄瑠璃「あたごの本地」を読む

久留島　元　KURUSHIMA Hajime

本稿は、古浄瑠璃「あたごの本地」本文研究の端緒として本文の精読を目指し、本文に漢字を宛て、注釈を施したものである。全六段のうち一～三段を掲載する。本文は横山重校訂『古浄瑠璃正本集成』五（角川書店、一九六六）を用いた。固有名詞には傍線――をふした。

『古浄瑠璃正本集成』解題を参照すると底本は六段、寛文期のものと思われ、刊記に「右者太夫直之正本也、はん木や彦右衛門板」、「天下一丹波少掾平正信」とある。梗概を示す。

一、聖徳太子の教育係として百済から日羅将軍が招かれる。月が二つ出たというので日羅が一つを射落とすと、白鬼となって自ら月の桂男を名乗る。首を打つと三足の兎となる。

二、日羅将軍を連れ帰るため百済から軍勢が来る。難波の浦で合戦となるが、日羅は百人をもって敵を退ける。

三、日羅は一度隠れるため愛宕山に登る。滝で龍に会ってこれを従えると、女の姿となって成仏する。日羅は滝の上に水神宮を建てる。日羅がさらに登ると大猪が襲ってくる。日羅がそれに乗ると、猪は天竺はくそん王の転生で、日羅を乗せた功徳で成仏したと言う。たちまち雷電とどろき、天狗の火がともるが日羅の肩から光が発し鎮火する。大天狗があらわれ日羅と格闘、組み敷かれた大天狗は是害坊と名乗って降参し、守護を約束する。

四、日羅と是害が秘術を応酬する。愛宕山から国見、名所揃え、天狗揃え。

五、難波に帰った日羅のもとに、百済王が日羅の妻子を殺したとの知らせが入る。日羅は絶食し死を祈る。聖徳太子が見舞うと日羅は愛宕峰の岩櫃に入って入定し王法仏法を守護する愛宕権現となると宣する。物部守屋が仏法をすすめることを難ずると蘇我馬子が怒って斬りかかる。是害坊が馬子を助け、守屋が切られる。日羅が死ぬ。

六、日羅の死が百済に伝わり、軍勢が押し寄せる。是害坊率いる天狗、阿修羅が百済軍を斥ける。百済王は生不動、二童子に助けを求める。是害坊が敗れると、日羅の霊があらわれ、不動を降す。聖徳太子は日羅を愛宕地蔵権現として祭る。

一読のとおり、百済の「日羅将軍」が来日して聖徳太子の師となり、天狗や本国の百済軍と争うという荒唐無稽な活劇である。このことから若月保治『古浄瑠璃の研究』[1]は、「日本の神国たることを強調しようとした意図に作為がおかれてゐる」「殊に機巧や糸操を自由自在に用ひて、全く機巧本位の作である」とまとめている。

これに対しアンヌ・マリ プッシィは日羅と天狗の述比べの場面などをふまえて「山伏性」を物語る、山岳信仰を反映した唱導物語と位置づける[2]。しかし全体には若月氏の分析にあるように金平浄瑠璃などに近く、創作性の高い、寛文期らしい作品と見なせるだろう。

物語の主役である日羅は六世紀、百済の官人。『日本書紀』のその名が見え、敏達天皇十二年（五八三）七月に来日し国策を献じたが、同行の百済人らに暗殺され、埋葬されたという。大伴氏配下の武人で百済の国情を漏洩したため暗殺されたかといわれるが、はやい段階から聖徳太子伝に組み込まれ、百済の高僧で太子の師であったなどと解されるようになった[3]。

本作では日羅は武略に通じた将軍で、愛宕山で入定し愛宕権現となる。愛宕権現を日羅の後身とする説は林羅山『本朝神社考』[4]や羌沆『看羊録』[5]に見られ、中世末期にかなり流布していたらしい。これは愛宕が勝軍地蔵として戦国武将の信仰を集めていたことを反映していよう。また、本作には現在に続く火伏の信仰に関する言及もある。

従来の研究で日羅については『日本書紀』巻第二十、天狗説話については『今昔物語集』巻二十第二話「震旦天狗智羅永寿、渡此朝語」、謡曲『善界』[6]、愛宕山縁起[7]との関連が指摘されている。それ以外に『善界』の出典である絵巻『是害房絵』[8]、『槻峯寺建立修行縁起絵巻』[9]、謡曲『愛宕空也』[10]などの影響も大きいようである。また日羅が大猪を乗りこなす場面は、勝軍地蔵が猪に乗る造形をふまえたものだが、『曾我物語』で新田忠常が猪に飛び乗る場面なども響いていよう。ほかにも種々の説話伝承が輻輳して入り込んでおり、中世から近世にかけての説話受容の実例として興味深い。

なお、いわゆるお伽草子『愛宕地蔵の本地』も伝本によって「愛宕の本地」と名付けられていることがある。国文学研究資料館提供の古典籍総合データベース収載の四点はすべて『愛宕地蔵の本地』伝本である。しかし若月氏も指摘するとおり内容はまったく別であり、この違いは愛宕信仰における中世から近世にかけての変遷[11]に関わるのではないか。

概説してきたように本作は、内容面での面白さに加え、中世から変化した近世初期の愛宕信仰の実態や、中世説話の受容を示している。本文の詳しい分析により、中世から近世にかけての豊かな説話伝承の動態が明らかになるものと期待される。

注釈の内容は、筆者が二〇一八年度に採択された日本学術振興会特別研究員PDの研究課題「縁起・地誌・俳書をめぐる天狗説話の受容と展開」の一環として、京都精華大学において輪読会を主催した成果である。研究会には堤邦彦氏、橋本章彦氏、加美甲多氏、門脇大氏、八木智生氏らに参加していただいた。また、二〇一九年八月一八日には「今昔の会」において研究発表を行い、小峯和明氏、松本真輔氏らから助言を得た。あわせて感謝したい。

あたごの本地[12]

［目　次］

一、日ら[13]、正とく太子（聖徳）[14]と、軍物かたりの事
一、日ら、かつらおのこ（桂男）、たいちの事（退治）
一、はくさいより軍兵波りなんばのうら合戦（百済・難波浦）
一、日ら、清滝川にて龍をしたがへ給ふ事
一、大龍、りう女（竜女）ニなり、たきをつたふ事
一、いのし、日らをおい、其くとくに（功徳）天上スル事
一、天ぐ共あまたあらはれ、火を出す事
一、日らの身よりひかり立、天くの火消ル事
一、大たうのせがいほう、日らとあらそふ事
一、天ぐ、岩をたゝき水を出シ雪の山ニスル事
一、日ら亀ヲニつ山にし、いせたんばのかめ山の事
一、天ぐ、くもにかけはしの事（雲）
一、日ら、はしのぎぼうし（擬宝珠）はじめ給ふ事
一、日ら、あさ日（朝日）をみなみより出ス事
一、同あさ日山のゆらい（由来）の事
一、四方の名所見物、同天ぐ（天狗）そろ（揃）への事
一、日ら、天ぐ共ニしゆご（守護）せられ、いわや（岩屋）入之事
一、龍神（龍灯）、りうとうヲさゝけ給ふ事
一、正とく太子（聖徳）、日らとわかれ給ふ事
一、りうぐう（龍宮）のあしゆら（阿修羅）、日らへかせい（加勢）の事
一、し（死）、たる日ら、つかより（塚）あらはるゝ事
一、いきふどう（生不動）、こんがらせい高（金迦羅制多迦）、かうさん（降参）の事
一、日ら、いぬをふどう（不動）のつかはしめ二渡事
一、日ら精軍、あたご大ごんげん（権現）とあらはるゝ事
一、正とく太子（聖徳）、やしろこんりう（社建立）の事
一、六月廿四日、こんげんみやうつり（権現宮遷）の事
一、ふどう（不動）、こんがらせい高、日本の神と成殊
一、あたごの神火ぶせの神と申ゆらいの事　」（表見返）

〔あたごの本地〕　〔百三〕

天下一丹波少掾平正信直之正本也

〔初　段〕

さても其後、それ日本は神国にて、諸神あまねく、わくわう*15をてらし、国土をまもらせ給ふ中に、山城の国、おたぎの郡*16、あたご山*17に立給ふ、しやうぐんちそうごんげん*18の御ほんちを、たつね奉れはじんむ世一世、びたつ天ぐ*19と申は、きんめい第二のわうし也、同第四の王子、やうめい天王の御子、しやうとく太子と申は、たうきんの御をいにて、十才にならせ給ふ。御さんならせ給ふ時、御手にしやりをにぎり、くちにはみやうがうを、となへさせ給ふゆへ、いか様にも此君は、ぶつぽさつの、へんさ*20ならんと、しよぎやう、をの〳〵、うやまひ申。

有時、御まへに、大とものかすで子*21をめされ、はくさい国の、にちら将くんは、ぶん有てぶあり。ちしんゆふの、三どくそなはる、けんせいの者ときく、かれをめしよせ、しやうとく太子に、道をまなばせよとの、せんじ也

時に、もの、へのおこしがちやくし、もりやの大臣*22、す、み出、「ちゑ第一のわがてうより、はくさいのにちらをたのみ、なにをかならはせ給ふべき。九州、まつらのなにかし、大とものさでひこ*23は、ぶんふ両道、くらからず、しをもつはらとし、天が下の事わざ、もらさす存候也。か、る者をは、さしおかれ、いこくの日らを、めされんは、かつうは、日ほんの、ひけなるへき」よし申ける。そがのむまこ*24が申様「其大友のさでひこも、いこくのふうそく、まなんでこそ、ちゑもさかんに候はん。其うへさんかんは、天ちく、しんたんをはなれ、しかも日本へ、あいしたがふくになれは、たりやうをたのむにいはす、せんしにまかせ、めしよせられ、然へき」よし申さる、。

きのおしかつ*25、きびのはしま*26、両人出、われ〳〵ちよくしにまいりたち、つれてさんだい仕らんと、御前を罷立、舟よをい、けつ（2オ）〔挿絵　第一図〕一ウ）〔挿絵　第二図〕二オ）かうし、供人あまた、打のせて、吉日ゑらみ、ともつなとき、はくさいこくへぞ、をしわたる、かいろ風はの、わさはいこへ、はくさい国にそ付にける。

すくに日らの、やかたへゆき、あんないかふて立入、日本の王のちよくしとして、おしかつ、はしま両人、わたりたる由、申さるれは、日ら立出、たいめん有、「さて只今は何のちよくぜんにて御ざい」と、つつしんで承る。きびのはしま、しやく取なをし、「しやうとく太子と申はとうきんの御おいにて、今年は十才なり、御年比より、かしこくわたらせ給ふにより、たれをか師と定、道をまなばせ給はんと、人をゑらみ給ふ中に御身はくがくたさいの事、きこしめしおよばせられ、召て参り、師となせとの、ちよくしに参候也。とくしてまいられよ」と申さるゝ。にちら、せんしを承り、「身のほまれ、世の聞へ、何かは是にまさるへき、去ながら、はくさいわうへ、此事うかゝい申、御意によつて参へき」よし申ける。きのおしかつ、さしよつて、「一とせ、しんぐうくわうこうの、せめなひけ給ひしより、しんら、はくさい、かうらい、三かんの輩、日本の王のせんしに、たれかはそむき申べき、はやとく〳〵」といさむれは、日らも今は尤と、おうけを申、つまや二人の子共を、近づけ、「日本の御門より我をめさる、、ちよくしたち、かいろにおもむき候ぞや。身ははや、おいきのゑだよはく、はる〴〵の、はとうをしのぎ、若もむなしくなるならは、此兄弟の若共を、日らがかたみと見給ひて、なき跡のたむけには、仏の御なをも、となへ給へ、いかに若共よ、われ此国になきとても、心よはく思わずして、君にもつかふまつり、母にもかう〳〵にあたるべし。父なに事なく、かへるなら、又こそめくりあいなん」と、こしかた行すへの事のみ、こま〳〵と申せしが、さすが御あいのわかれなれは、若もあわでや、はてなんと、思ふにせきくる泪にて、左右（二ウ）のたもとは、うくはかり。みだひも、二人の若共も、「おなし舟にてわれ〳〵をも、つれゆきて給はれや。おいたる父を只ひとり、ち、いきの道とをく、いかでかわたしまいらせん、ぜひ共に、我等をもつれゆき給へ、参らん」と、ゆんでめてよりいたき付、こゑもをしますなげかる、。

父も泪をと、めかね、「したふもどうり、去ながら日本よりの御いもなし、はくさい王のおそれも有、思ふにかなはぬ世のならい、なけきなからも、うき年月、おくりむかいて待給へ。互に命めてたくは、なとかはめくりあはさらん」と、けいてい、しんし、ふうふのてを、取むすび〳〵、いつれもめとめを見合て、なくより外の事はなし。ちよくしの人、、「是を聞、かくてはじこくもうつり候、とくして舟に、めされよ」と、おや子の人を、おしのけて、日らを、いざない、

出給へは、つまや子共は、いましばしと、すかりつかん、引きと、めんと、しけれ共、人、へだたり、日らをは、むかいの舟にのせ申、わかてうさしてぞをし出す。是は扨置、だいりには、くぎやう大臣、召あつめ、日らかむかいに、つかわしたる、おしかつ、はしま両人は、なにとてきてう、ゑんにん*27そや、にちらが、ちたいに及けるか、はくさい王か、おしとむるか、ふしきさよと有所へ、はしま、おしかつ、きてうして、すくにさんだい仕り、せんしに、まかせて、はくさいより、日らを、ともない参り候、つれてさんだい仕り候はんやと、くわんぱく天下へうか、い申。

うちよりのせんしには、さんたいさせよ、去なから、日らが心を、御らんせんため、しやうとく太子を召出され、おなし比なる、どうしあまたに、おなしいろなる、いしやうをきせ、し、んでんに、おかせ給ふ*28。

かくしてのちに、日らまいり、御門の御礼おはつて後、日ら太子を見奉り、「あれなる少人は、ぢよのどうしに、ましへへからす。御そうこうを見奉るに、た、人にて、ましまさず。きやうらい、くせくわんぜおんでんとう、此とうぼう、そくさん国へげんじ給ふの有かたさよ、おの〳〵（3オ）おがませ給へや」と、おしつおきつ、三ばいす、君も臣下ももろ共に、しやうとく太子は、ぶつばさつの、へんさにてましますぞと、おの〳〵はいし申さる、。

内よりのせんしには、「ちんは本より、あまてらす御神のそん王にて、とみのおがはの、ながれをしたい、あさか山の跡をふんで、しきしまの道に入、たまにも弓矢の、道をきかず、若も諸国に、らんおこらは、よせてしつむべき物がたり、きかまはしや」と、せんじ成。

日らちよくてう承り、「若けん王にまし〳〵て、たみをめぐませ給はんに、たれかはやしんのぞんすへき、もしもやしんの候は、、なつけてかれか、りにふくし、あたをおんにて、ほうぜさせ給はんこそ、道のみちたるときなるへし。わざわいは、下よりおこらず、上台人の心に有、一人ま事あれは、一家ま事有、一けま事あれは、一郡ま事有、一ぐんま事あれは、一国ま事有、一国ま事あれは、天下みなま事有。すめる中に、にごるもの有、兵をおこし候は、、日本に兵の共、さこそはおほく候はんつれ共、日らに、せんじ給はれかし。山じやうならば、ふもとより、たにをも岩をも、てつへきをも、はりくつし〳〵、さんじにやふり候へし。平城ならは、かさより取かけ、たかねのさは水、さんかのながれを切てしかけ、水におぼれてたゞよふを、かまくまてにて引よせて、きりなかし候は、、やよひなかばのはまあそび、れうすな取より、おもしろからん」と、いさむ心に身をわすれ、おとり上て申ける。

内にも御かん、な、めならず、重てのせんしには、「三かんの輩は、よく日本にしたがふか、へんしんもあらんや」と御たつね、くたりけれは日らが、ちよくとうに、「しんくうくはうごう、わたらせ給ひて、三かんは、いぬの国也と、ゆみのほこにて、大なるゆわに、かきつけさせ給ひしを、やすからす存るにや、上にはしたかい候へ共、ないしんにはそむき候。其（三ウ）いわれ、あいたかはず、中比、やしんをさしはさみ、みつぎ物をと、め候へしを、きんめい天王の、御なだめに、黍たね千石、きつねのかは百枚、其外、金銀へいせんを、つかはされ候ゆへ、きぶくし、みつぎをさ、け候。何となく、ちよくしを以、はくさい王、父子共に召れ、きこくの時、王子と、めおき、人しちに取おかせ給はい、しさいは候まし」と申上る。

御門ゑいふん、まし〳〵て、此なが物がたりに、日もくれけれは、ふしきやな東西の空よりも、月二つ出、東は本より西へ行、西なる月は東へよる、まはる事しやりんのごとく、君も臣下もおどろき、「是はいか成ずいそふやらん」と立さはかせ給ひける。

日らは少もさはかず、「其上もろこしにて、日りん九つ出給ふ、時のはかせ是をかんかみ、あゆみの木をつくらせ、のぼつて弓やをつがい、八つの日を、いをとしては、三ぞくのからすとなり、とびさつて候*29。今せ上のはしご、此時よりも初り候。此月も、東なるはま事の月、西はまげつと見へ候、長大なる木を以、かりやをたかくつくらせ、其上に、はこものをくみ上、日らのぼつて、ゐをとし候はん」と、事もなげにぞ申上る。

さらはかりやを、たてさせよと、時のばんでうあつまり、かりやをこそは立にける、これわがてうの、せいろうのはじめ也。

日ら弓とや引さけ、上てつがい、てうといる、いかつちのおつるをとして、ていぜんに、はつかる程の、大ほくと成て立たりける。

日ら是に有やとて、こしなるけんを、ぬきもつて、二つにさつと切われは、内よりびやつき、とび出て、「我は是、月にまとはる、かつらをのこ*30也、日らがいりきを、くたかんため、あらはれたり」と、ゆいながら、とびかゝるをかいく、

り、かつらおのこを、かいつかみ、まへにかつはとなげふせ、
「己は定てうさきならん、仙人かつに及とき、はくと、みをやき、やしのふ*31とこそ、聞ぬるに、今のわざはひ、なに事ぞ」と、くびてうと打給へは、五そくのうさきとあらはれて、とふがことくに、にげさりける。日らもつゞいて、おふ」

（四オ）［挿絵　第三図］（四ウ）［挿絵　第四図］（五オ）程に、山城の国西山本にてかいつかみ、おつつめ、くび打をとせは、くびは天に上り、され共むくろをは、づだ〳〵にきり、其川へながさるゝ、かつらをのこを、きつたるとて、かつらのさと、名付、なかしたるとて、かつら川共なづくる事、此時よりも申也。

然所にかのくび、日らをめにかけ、ほのをゝふきかけ、かゝりしを、ひつはつし、ついには中より切おとし、けんにつらぬき、かつらおのこのへんげをは、にちら将ぐん、うつたりと、なのりてなんば*32へ帰らるゝ、ぜんたいみもんのふしぎやと、みなかんせぬものこそなかりけり。

二たんめ

其後、はくさいの御門には、くぎやう大臣めしあつめ、さても日ら将くんは、いとまもこはず、日本へわたりゆくこそ、ごさんなれ、いそき兵をつかはして、つれてかへるか打てまいるか、うむの二つを定よと、げきりんはなはだかぎりなし。

三かのしん承り、すせんそうの兵せんに、くん兵あまた取のせて、日本さしてそをしわたる、なんばのうらよりくがにあがり、日らがやかたへおしよせ、たいこかね、もみ合、ときのこゑをぞ上にける、やかたの内には、思ひよらざる事なれは、上へ下へとかへしける。

され共日らは、すこしもさはかず、こだかき所にかけ上り、「あらめつらしの国人たち、日ら此ちへ、まいるにより、むかいにわたり給ふらん、ふな大将はたれ人そ、むしや大将はいつれそや、たいめんせん」と、よばはれば、むしや三ぎ、すゝみ出、大おん上に申せしは、まつさきははくさいのへい大将、はつくわうのとくに*33、其次は、せつさんのぢんくわん、跡につゞくは、さこくしらん、「なのらず共、われ〳〵が、てなみはかねて、しり給はん。わたくしの、はからいに、此ちにわたる、きつくわいさに、三将三千よきにして、是迄おしよせ候ぞや。君にいとまもこはずして、にけわたるのみならず、日ほんの王のやつことなり、はくさい王（五ウ）を、たばかりよせ、人しちに、取べきたくみ、去年ごくけつ、聞へしより、王のげきりん、なだめがたし、日ら国に、かへらるゝ、かくびばかり、きこくさするか、うつふんの、きはめ給へ、ちゝして我等を、うらみ給ふな、みだれ入て一々に、打とらん」と、のゝしつたり。

日ら聞て、から〳〵と打わらい、「いつのならひに、おのれらが、くもにりやう、竹にとら、しゝにほたんの、はたをさし、わが門外迄ばしやうして、あくこんをは申ぞや。あれ若者共、打ころせ、一人もいけて、かへすな」と、たからかに、よばはれは、承り候とて、われおとらしと、きつて出る。

てき身方入みたれ、髪をさいことた、かいける、さすかによせてはたせいも、みかたはわずか百人斗、みなうけ太刀になりけるが、ついにはあしを、ふみとめず、むら〳〵ばつと引て入、門さしかためて打出ず。

三かのしん、かつにのり、あの門を打やふり、つけ入せよといふまゝに、かねたいこ、かいのこゑ、もろ共に、かちどきをつくりかけ〳〵、出よ〳〵とおめきける。日ら将ぐん、其ひまに、思ひのまゝに六ぐ*34しめ、三またの大なきなた、ゑは八かくに、すちかね入、七尺五寸にこしらへ、みは五尺にもろは付、たとへばてつへき、かんせきにても、此長刀にあたつては、くたけずと云事なし

「ひさしく軍に、とをのきて、ものさひしく思ひしに、おいのなぐさみ、これならん」と、めてのかたに打かたけ、門の戸びらをしひらかせ、ゆらり〳〵と出けるは、とうはつびしやもん*35、たもんてんの、あれたるけしきも、かくやらんと、よせてもしたをぞまきにける。

日ら、長刀取なをし、「いかによせてのぐん兵共、此長刀にて、打ころされ、さいしになげきを、かけんより、引しりそいて、くにへかゑれ、同国のなさけには、命はたすけゑさすへし。はちをもはちとしり、さいしももたぬ輩は、是にてしやばの、いとまをこい、めいとのたびに、おもむけや、かゝれ〳〵」と、まねけ共、おちてさうなくちかづ（六オ）かず、軍大将是をみて、たとへばてつさんなれはとて、「人ひとり、中につゝんで、いけとれや打とれや」と下ちすれは、大ぜい一度に、きつさきをならへてかゝりける。

日ら大ぜいに、わつて入、おつつ、まくつつ*36、髪をさいごと、切めぐる、さすがのよせても、命にかけかへ、あらざれは、うしほのことく、さつと引、かさねていつる、ものはなし。

かちむしやの大将に、ほくさんきんこ*37と云あらもの、一文字に、かけ出〳〵、「あゝをくれたりめん〳〵や、日ほんのやつはらが、見るめをも、はぢさらんや、あの長刀をうばい取、めくらのつゑを、うしなふことく、ふためく所を打とらん」と、おめきさけびて、かけむかふ。

日らにつこと打わらい、「此長刀をとらんとや、はかたはおそれて手もかけし、是とれや、とらせん」と、ゑをさし出し給へは、ほくさん両てに、むんすとにぎり、いかつちがおちか、つても、にぎつたるゑは、はなさしと、はがみをなして、とらんとす。日らにつこと、わらいながら、かたてにてさしのばし、とらするぞ、とらぬかと、すこししづんで、もろてかけ、きんごをすくひはね上て、おとしもつけず、うつ程に、二つになつて、はてにけり。

なんさんらんき*38、是をみて、あへなききんこが、しにさまや、とふらい軍に、日らがくび打て見せんとて、おもてもふらず、か、りける。日らは事共、思はばこそ、てう〳〵と打合、そらにげしては、ひらりとまはり、ころさばとくに、ころすへきが、心ざしの、やさしさに、うけつ、はついつ、や、しばし、ほねをおらせ、引はづいて、てうどうつ、ゆんでのかたよりめてのわきまで、是も二つに、なりにける。

せいさんやうこ*39、つつと出、「何とておの〳〵すゝまぬぞ、かた〳〵国を出し時、日らがくびは、われとらん、いやたれかしがとらんとて、山も見ぬまのかりことば、はやくもわすれ給ふよな、くわごんゆはざるせいさんが、日らを打て、見せん（六ウ）」とて、もつたるけんを、車のことく、ひらりくるりと、打ふつて、まつしくらに、か、りける。

日ら長刀つゑにつき、こくびをかたむけ、見物して、「わとのは、三かん一ばんの、けんの上ずと、いわれしもの、只今、ころさん事のをしさよな、さいこの十念となへよ」と、いふよりはやく、うつ程に、是も二つになりにける。

四ばんに、とうざんやしやらせつ*40、日らが、なぎなた、かいくゞり、こしのよはみを、むんすとだき、「日らをは、くみとめたり、みな〳〵、よれや〳〵」と、おめきさけびて力を出す。大ぜいとつと、か、りしを、こしなるてきには、てもかけす、長刀をさしのばし、切はらい〳〵、こづめの、やつはら、はらいのけ、やしやらせつか、上おび取、こひざかへしに打たをし、くひ打おとし、すてけれは、又大ぜいか、りしを、なぎなたもくだけよと、こくうむりやう*41に、きりけれは、只一時の其間に、二千七百三十人、残るやつばら、むら〳〵ばつとおつちらし、長刀かたに、うちかたけ、しんつ〳〵と引給ふ。かの日らの御手から、きせん上下をしなへ、みなほめぬものこそなかりけり

三たんめ

其後、はくさい国の三かのしん、日らにていたく、かけたてられ、なんはのいくさに、うちまけて、兵このうらまて引しりぞく、爰にてないだん、する様は、さきてはかきりと、た、かへと、こづめのせいの、なきゆへに、身方はいほく、ぜひもなし。つくしのはかたへ、ふねをまわし、はいくんのまち、つれてはくさい国へ、かいちんし、重てたせいおしわたり、今度のちしよくをす、かんと、其き尤然へきとて、ちくぜんのれんぜんのつ、そでのみなとに待うけ、残るせい共打のせて、はくさい国へそかへりける

是はさておき、にちら将くん、思はれしは、「此度のかつせんは、我をおしむ軍なれは、よせてとてもにくからず、さのみに（七オ）〔挿絵　第五図〕（七ウ）〔挿絵　第六図〕（八オ）人を、ころしては、天のとがめも、おそろしし。されはとて、はくさい国へかゑれは、日ほんのけちにそむく也、しよせんいかなる、さんりんにも、すみ所もとめ入、よをのがれんと思召、家の子にも、かくともいわず、只一人なんばを出、はやしやしける、もりぐち*42の、なわて*43のすへも、ひらかた*44や、たれかさだめし、さだのさと*45、いわしみつ*46に、すむ月は、おとこ山おや、てらすらん。よどの川せの、あしろ木に、打よせかゝる、浪のつゞみも、おとたかく、わたせるはしを、打わたり、とばにてとへば山城の、おたきのこはりに、つき給ふ。

あたこの山はみねたかく、ふもとにながれながうして、ぜゝのちまたも大川、秋なれはこそ、木ゝのはの、もみちのにしき、きてうかむ、はるは花をや、ながすらん、此さん上を、見ばやとて、さがのさとより、山道に、よち上らせたまひける。はるかに上り、み給へは、たきのをと、れい〳〵と、そこもにごらぬさんか有、さてもきよき、たきがはやと、の給ひしより、今の世迄も、きよたき川*47とは申也。ふしきや、たきなみ、立さわき、ひかり、こがねのことくなる、大りう一つ、水をつたい、日らをめにかけ、あらはるゝ、只一くちと、とびかゝる。日らはけんの、ぬき持て、きらんとすれは水に入、出てはにちらに、おゝいかゝる、日らは

りやうを、取ひしかんとつかみつけは、ふりはなし、ふりはなせは又取付、くるり〳〵と、付てまはり、ついにはかしらの、つのをつかみ、おしふせて、取おさへ、「それせんりやうは、一寸より、天上のくわをうけんと、大なる望有により、人をあやまつ事はなし、おのれはま事の龍にてあらし、此山の、こらうやかん、日羅が心を、引なんため、へんくわしてこそ出つらん。ま事のすがたを、あらはせよ」と、つのを持て、龍のかうべを、ふりあけ〳〵の給へは、りやうは日羅を ふりはなし、たちまち龍女のすかたと成、「我りうくうの、おとひめ也、たつとき人の、けちゑん（八ウ）にて、下かいのくるしみ、のがれんと、たきにすむ事、一千年、只今、日羅の御めにかゝり、ぶつくわぼだいの、みとなりたり、あら、有かたやと、らいはいし、たきなみをつたふ事、へいぢをあゆむ、ことくして、たきの上にそ、上りける。日羅は、ふしきの思ひをなし、たきの上にやしろをたて、すいしんの宮*48とあがめ、今の世迄も有とかや。

それよりみねに上らるゝ、しんりんかよはぬ山なれは、わか木はゑたに、ゑたをかさね、おい木はたおれ、よこたわり、からたちいはら、おいしげり、行へき様のなきまゝに、つたかつらに取付て、そはつたいし給へは、ゆはねのしつこけむして、足ふみたてんやうもなし。

かゝる折ふし、山かけより、そのたけ八尺あまりなる、いのし、一つ、あらはれて、日らを取て、ふくせんと、きばかみならし、はなあらしに、山のおちばをふみ立て、一文字にちかづきよる。日らいのし、御らんして、「くつきやうの、のり物かな、きやつに打のり、山上まて、心やすくゆかはや」と、とんでかゝるを、かいくゞり、うしろさまより、ひらりとのり*49、ひざにてし、の、どう中も、ちぎれてのけとしめつけ、ゆんてにて、み、をつかみ、めてにはけんを、ぬきもつて、「おのれわれをおいながら、此みね迄つれ行べし。おとしてあやまち、さするにおいては、此けんにつらぬきて、たにのはくすと成へきそ、命をしくはつれゆけ」と、けんのひらにてうち給へは、さすかにたけきいのし、も、ぜひにかなはぬ、おもぶりにて、いわをつたへて、はるかのみねへそ上らる、*50。

みねにもなれは、日らひらりと、とひおりて、「近比、ほねおり〳〵や」と、し、のせなかを、なて給へは、し、はたちまち、ちごと成、「われ天ちくのはくそん王也*51。おゝくのし、を、そなへに取、其つみむくいて、し、となり、あしはら国の山、を、めぐり〳〵て今爰に、にちらをおいたる、くとくにより、成仏とくだつ仕る、残る山のいのし、共、つかわしめに、まいらする、いとま申て、さらば」とて、天のほんとに、かへりける、日らは、きたい」（九オ）〔挿絵　第七図〕（九ウ）〔挿絵　第八図〕（十オ）の事なりと、あとを見おくり給ふ時、そらにわかに、かきくもり、雨は、しのにて、つくがことく、らいてん、いかづち、なりわたり、山はうごきて、しんどうし、たにのあらしは、大ほくを、ねよりみね迄、ふき上る、大ばんじやくも、おどり上り、山中、ちやうやの、やみとなる、すぎたつさはを、見給へは、天ぐあまた、へんまんし、こずへ〳〵に、火をとぼすは、只まんとうの、ことく也。

日ら此由、御らんして、「にくきませうの、わざはひかな、出〳〵天ぐの火をけさんと、日らの両の御かたより、ひかりたつ事、くわゑんのことく*52、天ぐの火は一度にきへ、山中ひつそと*53なりにけり。此ときよりも、あたごの神を、ひふせの神とは申也。

其後、はやしの木のまより、せいの高さ、一丈あまり、かしらはくまのくとく、両がんは、あかつきの明星のかゝやくふぜい、しやくめんに、こうりやうはな、くちはみゝのきはまできれ、かなざいぼうを、つゑにつき、あゆみよつて、いふ様は「そも此山は天ぐ共、ゆふきやうの所也、うろの身*54にてまいる事、きつくわい也、らうぜき也、いそひでふもとへ、さがり給へ、のび〳〵に心へて、我ばしうらみ給ふな」と、はつたとにらんで申せしは、こと〳〵敷こそ見へにけれ。日ら、きやつを、あらで、は、中〳〵てもとへ、ちかづくまし、たばかつて、くみとめんと、わさとこゑをふるはかし、かたみをすぼめ、つくばいより、「我はいこくの者なれは、かく共しらで参たり、まつひらゆるし給へや」と、そらでを合、ちかつきて、ゑたりやあふと、ひつくんたり、くだんのゑせもの、こゑをあけ、「あらむねんや、口おしや、たばかられても、くみまけし」と、日らを中に引上て、十でうばかりの、たにそこへ、ゑいやつと、なげけれは、日らひらりと、とびかへり、又くせ物にいだきつく、きやつは本より大力、日らをつかんで、今度は又、はるかのみねへ、なけ上たり、日らもせんじゆつ、おこなへば、又みねよりも、とびおりて、はねはみちんになるとても、お」（十ウ）のれをは、あまさじと、つきはなせは、つかみ付、おしつおされつ、かけつからんず、「ゑいや〳〵」とゑいこゑあげ、二時斗くみあひしが、日らせいきや、つかれけん、すこしあしたち、かたさがりに、よろ〳〵と、なる所を、「ゑたりやあふ」と、

をしたをし、のりか、つて、日らのくびを、引ぬかんと、おめきしを日らは両てを、さし出し、かたきの両の、かいなを取、はねかへさん、おき上らんとし給へと、てきの力やまさりけん、思ふにかなわせ給はぬが、いつまてかくて有へきと、こんがう力を出し、「ゑいやつ」と、はねかへし、かのゑせものを、くみしきて、今こそ心やすけれと、しばらく、いきをそつぎ給ふ。

したなるてきが申様、「そも〳〵御へんは、なにものぞ、こう申あら物は、たいとうの、せがいほう*55とて、せかいの天ぐのつかさ也、我をか様にせんものは、天か下には覚へぬぞや、なのり給へ」と申ける。

日らなを〳〵、つよくおさへ、「さてはませうの、とうりやうかや、我は日ら将ぐんとて、此山にちをしめて、大ごんげんとあらはれ、あまねく衆生の、弓や神と、あをがれんと思ひしを、さまたげんとする天ぐ共の、ねをたつて、はをからさん、まづおのれから、切はしめん」と、こしなるけんを、ぬき給へは、せがいほう、手を合、「左様の人共、存ぜすして、てきたいするは、もつたいなし、たすけゆるさせ給ふなら、御身を山の、主となし、山〳〵の天く共、みなつかわしめの、ひくわんとなり、あたごをしんする輩には、かけみそふて守べし。御身を、ひはうするものをば、たちまちに、けころして、おんをはうし奉らん、命をたすけて給はれ」と、さま〳〵こうさんしたりける。

本より日らは、じひふかし、「かならすやくそく、たがゆるな」と、とつて引たて、ゆるされて、あまのいのちを、ひろいたりと、悦事はかぎりなし。大将だにもかくいへば、ましてや、うとき天く共、われも〳〵とかうさんし、いにようかつごう申ける、とにもかくにも、かの日らの御心、うれしき共」（十一オ）中〳〵、なに、たとへんかたもなし。

以上、三段目まで。

『古浄瑠璃正本集成』五（角川書店、一九六六）より

*1 若月『古浄瑠璃の研究』桜井書店、一九四三年

*2 アンヌ・マリ プッシィ「愛宕山の山岳信仰」五来重編『山岳宗教史研究叢書11　近畿霊山と修験道』名著出版、一九七八年。

*3 聖徳太子伝における日羅伝承については松本真輔「日羅渡来説話から見た聖徳太子伝の「古典知」」『アジア遊学一五五　もう一つの古典知　前近代日本の知の可能性』勉誠出版、二〇一二年参照。

*4 『神道大系論説編二〇　藤原惺窩・林羅山』神道大系編纂会、一九八八年。寛永末から正保二年（一六四〇ごろ～一六四五ごろ）に成立、全国の神社の縁起を集成しつつ神仏習合を批判した内容。愛宕山の項目では「愛当山の神は日羅の霊なり」と記され、具体的には駿府で幕下（家康）が言及したのを聞いた、としている。

*5 東洋文庫『看羊録　朝鮮儒者の日本抑留記』平凡社、一九八四年。慶長の役で藤堂高虎軍の捕虜となった朝鮮儒者の手記。一六〇〇年釈放され、王に日本の情勢を報告した内容を再編し五四年成立、五六年刊。愛宕山については「新羅人日羅」であり倭人は「太郎房」「愛宕山権現の守り神として尊び祀」っているとしている。

*6 医師であった竹田定盛（一四二一～一五〇八）晩年の作品という。絵巻『是害房絵』に材をとり、大唐の天狗、善界が愛宕の太郎坊の案内で比叡山の高僧に挑むが撃退される内容。

*7 愛宕山縁起によれば、愛宕山は大宝年間に役小角と泰澄が地蔵など五仏や三国の天狗による啓示をうけて開いたという。はやく横川景三『愛宕護山修造幹縁硫井　序』（延応四年、一四九二）に記され、林羅山『本朝神社考』『山城名勝志』ほかに収載されている。徳田和夫「寺社縁起と文化現象―愛宕山縁起を巡って・もう一つの是害房説話―」『中世文学と隣接諸学8　中世の寺社縁起と参詣』竹林舎、二〇一三年。

*8 鎌倉期成立の絵巻。『今昔物語集』巻二十第二話、『真言伝』慈忍伝などと同じく唐の天狗が比叡山の高僧に撃退される物語を描く。最古本である曼殊院本奥書によれば、延慶元年（一三〇八）に成立したものが転写された。

*9 明応四年（一四九五）秋成立、詞書は正三位橋本公夏、絵は土佐光信かとされる。細川政元によって製作、奉納された。百済僧日羅が聖徳太子の命令により摂津国剣尾山で霊木を発見し、天狗の来遊する地をおさめて槻峯寺を建立する。

*10 作者は観世信光（一四五〇～一五一六）。空也が愛宕山の龍神を教化する内容。

*11 愛宕信仰については近藤謙「アタゴの神の変貌」『平成二十三年度特別展　愛宕山をめぐる神と仏』佛教大学宗教文化ミュージアム、二〇一二年四月が詳しい。

*12 寛文期中型本。天下一丹波少掾平正信直正本、板木は江戸の板木屋彦右衛門。

*13 日羅は百済の達卒、火葦北国造（肥後国葦北郡）、阿利斯登の子。『日本書紀』敏達天皇十二年七月に来日したが、十二月に暗殺された。解題参照。

*14 用明天皇の皇子。厩戸豊聡耳皇子、上宮太子などともいう。実伝は不明だが、推古天皇の摂政として蘇我馬子とともに内政、外交に尽力し、仏教政策を行ったとされている。その一代記は『聖徳太子伝暦』などにまとめられて伝説化し、日本仏教の祖として重視された。

*15 仏菩薩が威徳や智慧の力をやわらげ、仮に現世の衆生にあらわす光。

*16 山城国にあった郡。最北部に位置し、東に比叡山、北に金毘羅山・鞍馬山が連なる。愛宕山は本来葛野郡に属するが、同字表記のためしばしば混同された。

*17 京都市西北隅に位置し、丹波との国境。古くは丹波国に属した。標高九二四メートル。中国の五台山に擬して山中に朝日・大鷲・高尾・鎌倉・竜上の五峯があり、頂上に愛宕神社、東の峯に月輪寺がある。

*18 坂上田村麻呂が東征の際、勝敵毘沙門と対で祈ったとされ、武装した姿であらわされる。『承久三年四年日次記』に初見、東大寺僧聖覚が後鳥羽院の命令で造立し幕府調伏を祈祷した。その信仰は『蓮華三昧経』に拠るとされ、良助法親王（一二六八～一三一八）が定着に関わったという。黒田智『中世肖像の文化史』ぺりかん社、二〇〇七年。

*19 敏達天皇。第三〇代天皇。欽明天皇の子。在位五七二～五八五。

*20 菩薩などが姿をかえて衆生をすくうためあらわれること。

*21 大伴糠手子（おおとものぬかてこ）。小手子の父。名は奴加之古ともいう。敏達天皇十二年、百済から招かれた日羅に任那再興策をたずねたという。

*22 物部尾輿の子。物部弓削守屋ともいう。敏達、用明天皇に仕え、排仏政策を主張した。用明天皇二年（五八七）、擁立した穴穂部皇子が蘇我馬子に殺されたため孤立、居住する河内国渋河で敗死した。

*23 大連、大伴金村の子。『日本書紀』によれば宣化天皇二年に朝鮮に渡り、任那を鎮め新羅を斥けた。また欽明天皇二十三年には兵を率いて高句麗を打ち破った。『肥前国風土記』松浦郡条などに松浦佐用姫をめぐる伝承がみえる。

*24 蘇我稲目の子。仏教政策をとり、用明天皇二年、物部守屋、穴穂部皇子をほろぼして崇峻天皇をたてるが、同五年、天皇を暗殺し推古天皇を即位させた。推古天皇三十四年

（六二六）五月に死没。

*25 紀国造押勝。『日本書紀』によれば、日羅を召喚するため百済へ派遣されたが威徳王に拒否され帰還した。

*26 吉備海部直羽嶋。紀押勝とともに日羅の召喚を百済王に拒否された。同年再派遣されると百済王を介さず日羅に会い、その助言を得て日羅とともに帰国した。

*27 えんいん（延引）の連声。浄瑠璃『箱根山合戦』四「かかる所に若君、ちこくゑんにんするゆへに、」

*28 以下、日羅が聖徳太子を見破り拝礼する場面は『聖徳大士伝暦』、『三宝絵』中、『法華験記』上ほかにみえる。

*29 『淮南子』などにある羿の逸話。『太平記』巻十二にも記載。

*30 月の世界に住むという伝説上の男。呉剛といい、月の桂を伐って仙薬とするという。『梁塵秘抄』「月は船星は白波雲は海　いかに漕ぐらん桂男はただ一人して」、『譬喩尽』「月を久ふ詠めて居ぬもの。月の中の桂男に招かるると三年の中に死ぬる」。後半の桂川の由来については不明。

*31 いわゆる「月の兎」説話。ジャータカに由来し、日本でも『今昔物語集』巻五第十三話、『塵囊鈔』、『法華経鷲林拾葉抄』などに見える。

*32 『日本書紀』によれば日羅は難波館（難波津に置かれた迎賓館）に滞在した。

*33 『日本書紀』に、日羅とともに来日し、暗殺に加わった百済官人として徳爾の名がある。「せつさんのぢんくわん」「さこくしらん」は未詳。

*34 六種をもって一揃えとする武具。

*35 兜跋毘沙門天のこと。金刀比羅本『保元物語』上「かの刀八毘沙門の悪魔降伏のために、」

*36 追つ捲つ。浄瑠璃『四天王高名物語』三「おもてもふらずをっつまくっつたたかひける」

*37 北山金吾、か。未詳。

*38 南山乱鬼、か。未詳。

*39 西山妖虎、か。未詳。

*40 東山夜叉羅刹、か。未詳。

*41 めったやたら。虚空無性、虚空無天。『見外白宇瑠璃』一「『よき結縁ぞ』とて、こくう無性に尊がり」

*42 大阪府守口市。府の北東部、淀河左岸に位置する。東海道守口の宿があった。

*43 大阪市四條畷市。府の北東部に位置し、生駒山地から北部は枚方山地。

*44 大阪府枚方市。琵琶湖から大阪湾に至る中央低地。

*45 大阪府、旧北河内郡蹉跎村。現在の枚方市の南西部。蹉跎神社（枚方市）は蹉跎天満宮ともいわれる。

*46 京都府八幡市八幡高坊、男山にある神社。旧官幣大社。皇室の宗廟として信仰を集めた。

*47 小野郷村（現北区）の桟敷ヶ嶽を水源として、愛宕山の東麓から保津川（桂川）に注ぐ川。

*48 清瀧神社。『愛宕山白雲寺縁起』によれば、大宝年中、役小角と雲遍上人が山に登り、清瀧に至ったとき地蔵、龍樹、富楼那、毘沙門（あるいは愛染明王を加え五仏）が現れ光を放った。また大杉の上に天竺の大夫日羅、唐土の大夫善界、日本の太郎房が出現し、山の守護を宣した。そのため小角、雲遍は杉樹を清瀧四所明神として千手観音を安置したという。なお龍神を教化する逸話は能『愛宕空也』に通じる。

*49 新田忠常が大猪に飛び乗る描写をふまえるか。『曾我物語』巻八「避くべき隙もなければ、忠経力及ばず、猪に逆にぞ乗つたりける。手綱もなければ、猪の尾を手綱として三町ばかりぞあがかせける。」

*50 猪に乗る勝軍地蔵像は、同じく軍神である摩利支天との混交から生まれたものかと思われる。『子やす物語』「あるときはいくさかみ（軍神）となつてはしらい（白猪）にのり」

*51 若月保雄は「はんぞく王」とする。班足王は『賢愚経』、お伽草子『玉藻の前』などに登場する天竺の王。

*52 『日本書紀』敏達天皇十二年に、「時日羅身光有如火焔。由是徳爾等恐而不殺。」とあり、日羅が光を放つこと炎のようであったため暗殺しようとした徳爾らが怖れたという。炎のように光を放つという表現は『聖徳太子伝暦』その他でもあらわれ、日羅の異人性を示す特徴。

*53 ひっそりに同じ。浄瑠璃『四天王最後』四「つぎのまに入、ひっそとなりをしづめたる所に」

*54 煩悩から逃れられない凡夫の身。

*55 唐の天狗。『是害房絵』では大唐の天狗の首領仏法障碍のため来日するが比叡山の高僧に撃退されたという。『是害房絵』にもとづく能「善界」（是我意）がある。久留島元「天狗説話の展開―「愛宕」と「是害坊」―」『国際日本文化研究センター国際集会45　怪異・妖怪文化の伝統と創造―ウチとソトの視点から』二〇一五年一月。